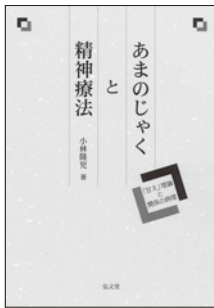


## ■ 書 評



あまのじゃくと精神療法  
—「甘え」理論と関係の病  
理—

小林隆児 著

弘文堂

2015年5月 224頁

本体価格 3,400円+税

DSM-5において、自閉スペクトラム症、注意欠如多動症に加えさらに精神遅滞を包摂した「神経発達症群」の概念が提唱された。自閉症、アスペルガー障害を含む広汎性発達障害に対し、より明確に器質的な要因を想定した組み換えであるように思える。しかし、神経発達症の具体的な内実は明らかになっておらず、これといった生物学的な治療手立ては全く見出されていない。そうした状況において、小林隆児氏が本書で力強く提唱している親と子の関係性に注目する「関係発達臨床」の視点はおおいに評価に値する。氏は土居の「甘え」理論に立脚しながら、自閉症には乳幼児期に「甘えたくても甘えられない」甘えのアンビヴァランスが認められることを説き、母親、子どもに対する言葉を介した精神療法的なかかわりの有効性を説く。本書には氏自身が行った多数の精神療法過程が提示されている。それは周到な記述的エビデンスとして説得力をもつ。1例をあげよう。

高機能広汎性発達障害と診断されるA男(7歳)は、乳幼児期から過敏で、母親は様々な苦勞をしてきた。母親の話聞いていて「気の張りつめた息苦しさを感じとった」治療者は、次の言葉を投げかけたという。「これまでお母さんは遊びのないハンドルで車を懸命になって運転してこられたように感じますね」。この言葉を聞いた母親は、「まもなく涙ぐみ始め、少し肩の力が抜けたように感じた」という。

その時、それまでセラピストと遊んでいたA男が、急に面接している場にボールを投げ入れた。すぐさま「注意喚起行動」であると見て取った治療者は、「A男の気持ちを受け止め、おどけたようにして大袈裟に驚いて見せた」。この治療者の即興的な振舞いに呼応するかのように「A男が母親の傍に寄ってきてまわり

つき始めた」。

これは治療場面で生成した意味深い出来事である。この出来事について筆者は次のように解釈する。

「これまでお母さんは遊びのないハンドルで車を懸命になって運転してこられたように感じますね」という「メタファー」に触発されて、「母親のそれまでの対人的な構えが緩んだ」、それにより「A男は母親に急速に近づきやすく感じとったのであろう。つまり甘えやすくなったのだ」。

スリリングな治療展開の記述と解釈を読むだけで、著者が自閉症に対し幅広く鋭い精神病理学的理解をもち、それに裏付けられた機知に富む言葉を発することができる卓越した精神療法家であることがよくわかる。もともと自閉症について論じてきた筆者は、神経症圏の病態についても同じ視点から光をあて、考察を展開していく。著者の論点は非常に鋭く、貴重な問題提起をしている。

著者は病理的な関係発達臨床の中核を、子どもが母親に「甘えたくても甘えられない」アンビヴァランスに求める。評者としては、甘えというとき、相手に対し自分の愛を認めてもらおうとする承認の欲望が重きをなすという見方をしたい。その承認の欲望は子どもから母親、あわせて母親から子どもへの双方向性があるはずである。一部の母親は子どもに対し、自分の愛を認めてもらおうとする承認の欲望が強い。甘えの術語を用いると、母親が子どもに甘えるという振舞いである。これが満たされないと、母親は欲求不満を余儀なくされる。本書のなかには、神経症圏を含め子どもとの関係がしっくりせず不満を抱く母親の事例がいくつか提示されていた。そうした母親の不満のなかには、子どもに対し期待する承認の欲望の挫折とみることができる性質のものもあると思う。フロイトーラカンの見地に立つなら、承認の欲望を受け止める回路は、最終的に父親の審級に求めなければならない。概して甘え理論では、母子関係に焦点が当てられ、少なくとも明示的には父の審級が問題にされないように思う。しかし、このたび関係発達臨床の実際を知り、治療者が見事な父の機能をしていることがわかった。

神経症圏だけでなく自閉症に対しても精神療法の重要性を説く本書は、精神科臨床における言語を豊かにしてくれる点でも刺激的である。評者自身初めて学んだことが多く、大変勉強させていただいた。

(加藤 敏)